

火垂るの墓

池田眞也

『火垂るの墓』

池田眞也

#タイトル 「火垂るの墓」

#イメージ

黒い画面。

一筋の光が上から下へ流れていく。

光の筋、2つ、3つと増えていき、ついには無数のそれが画面を覆う。

画面の下のほうで、光の海が揺れる。

被って

節子の声 「……………虫みたいやな」

清太の声 「……………ああ」

節子の声 「お母ちゃん、大丈夫やるか」

清太の声 「……………さあ」

#遠くに見える神戸の町

350機以上のB29による焼夷弾が次々と落ちてくる。

燃え上がる街。

#丘

燃える神戸を呆然と眺める人々。その中に幼い兄妹、国民服姿の清太(15)と人形を抱えた節子(5)。

#道(回想)

空襲警報のサイレン。

逃げる人々。その中に清太と節子。

節子、転ぶ。

清太、節子に駆け寄ろうとする。

警防団員A(35)の叫び声。

警防団員A「退避！」

「ゴー！」という爆音。

清太、その場に伏せる。

清太と節子。かたつむりのように体を丸め、両手を顔面に大きく広げ、親指で耳をふさぎ、残る指で両目をぎゅっと抑える。

白い煙をふく小さな円筒（焼夷弾）が、二つ三つ落ちてきて燃える。

清太立ち上がる。

清太と中年女A(45)、防火水槽の水をバケツで汲んで、その火を消す。

次々と落ちてくる焼夷弾。

清太、消すのをあきらめ節子とともに逃げようとする。

消火作業をやめない中年女A。

小さな炎が集まって、大きな炎となる。

中年女A、あつという間に炎に巻き込まれる。

中年女A「熱いイイイイイイ！」

清太「……………」

どうすることもできない清太。節子を連れて走り去る。

* * *

燃える家々。

逃げ惑う人々、その中に清太と節子。

若い母親(27)が助けを求めている。

若い母親「かずおちゃんが燃えちゃうよお！」

みな目もくれず、ひたすら逃げる。

#川(回想)

人々は炎から逃れるように次々と川の中に入っていく。彼らに

続く清太と節子。

流れが強く溺れそうになる清太。

いっばいの人を乗せた小船。清太しがみつく。

清太「乗せてください」

男 A「もうぎりぎりなんや。別を当たってくれ」

清太「お願いします」

男 A「恨まんでくれ」

男 A(50)、清太の手を足でふみつける。

痛さのあまり手を離す清太。

清太と節子、流れに飲み込まれる。

低空飛行の B29。

操縦室から見える小船。

爆撃。

燃え上がる小船。

人々の叫び声。

川岸にたどりついた清太と節子、燃える小船を眺める。

真っ赤に染まった川の水。浮かぶ数々の死体。

#木の下

夕立のような雨。黒い雨。

雨宿りをしている清太と節子。

清太「これが空襲の後に降るいうやつか……」

雨が地面を黒く染める。

清太「もうちよつと休んでからいこ。……体なんともないか、節子」

節子「下駄ひとつあらんようになった」

清太「兄ちゃん、買うたるよ。もつとええのん」

節子「うちもお金持つてるねん」

がま口をみせる。

節子「これあけて」

清太開ける。

三つ、四つの一銭五銭玉。鹿の子のお手玉、赤青黄色のおはじき。

節子「お家焼けてしもうたん？」

清太「そうらしいわ」

節子「お父ちゃんに、仇とってもらわなあかんねえ」

清太「……せやな」

警防団員B(42)の声が聞こえてくる。

警防団員Bの声「上西、上中、一里塚のみなさん……」

清太「よっしゃ。おんぶし」

清太、節子をおんぶして歩き出す。

#道

自転車に乗った警防団員Bがメガフォンでどなっている。

警防団員B「御影国民学校へ集合してください。上西、上中、一里塚のみなさん」

清太「お母ちゃん学校におるで」

清太駆け出す。

#街

国道に三台つながって往生している路面電車。

* * * *

屋根の骨組みだけになった駅。

* * * *

六甲山のふもとまで続く焼け跡。

* * * *

道端にへたりこむ家族連れ。

* * * *

転がる死体。

* * * *

清太、節子をおぶりながら破壊された町を歩く。

強い風、「ドーン」という大きな音。そのたびに節子おびえて、

清太の背中に、ひしとしがみつく。

清太「えらいきれいさっぱりしてもたなあ」

#御影国民学校、校庭

衛生兵の処置を受ける行列に、清太と節子が並んでいる。

向かいの娘（25）が清太に声をかける。

向かいの娘「清太さん、あんた清太さんやろ」

清太「どうも」

向かいの娘、節子を気にしながら耳元で囁く。

向かいの娘「お母さんに会いはった」

清太「いいえ。どうかしたんですか？」

向かいの娘「はよいつてあげな。怪我しはったんよ。中に連れていかれたわ」

清太「え！」

向かいの娘「うちみてたげる。（節子に）怖かったねえ節ちゃん、泣かんかった？」

節子「節子も行く」

清太「ここで待つとれ」

向かいの娘「節っちゃん、お姉ちゃんと一緒にいよ」

走り去る清太。

節子「節子も行く！」

#同、医務室

所狭しと寝かされているけが人たち。うめき声をあげているが

比較的軽傷。

黙って立っている清太に、町会長の大林（52）が話し掛ける。

大林「ああ清太くん。探してたんや。元気やった？」

清太「ええ」

大林、ヒスイの指輪を渡す。

清太「……！。お母ちゃんは？」

大林「こっちや」

部屋から出て行く大林と清太。

#同、工作室

重傷者が収容されている部屋。

大林と清太が入ってくる。

包帯でぐるぐる巻きにされ、口の部分だけ黒い穴があげられた

状態の母親、美弥子(36)。

美弥子の前に立つ清太と大林。

見覚えのある母親のもんぺ。

清太「お母ちゃん」

美弥子に話し掛ける清太を、大林が制す。

大林「今、ようやく寝はったんや。どっか病院あったら入れたほうがええねんけどな」

清太「あの、お母ちゃん心臓悪いんですけど、その薬もらえませんか」

大林「ああ、聞いてみような」

#同、砂場

節子と向かいの娘がアイスクリームをしゃくる道具をおもちやにしている。

清太が戻って来る。

向かいの娘、清太にかけよると小声でささやく。

向かいの娘「わかった？」

清太「はあ」

向かいの娘「お気の毒やねえ。なにかできることあったらいうて頂戴。そや乾パンもろうた？」

清太首を振る。

向かいの娘「うちとつてきたげる」

娘去る。

清太、節子に指輪を渡す。

清太「これ財布へなおしとき、なくしたらあかんで」

節子、清太を見る。

清太「ほら」

節子、がま口におさめる。

清太「お母ちゃんキキわるいねん。じきようなるよってな」

節子「どこにおるのん？」

清太「病院や。そやから今日は学校へ兄ちゃんと泊まって、明日西宮のおばちゃん知ってるやろ。あしこへいこ」

節子、だまって砂のかたまりをいくつも作っている。

娘、乾パンを持って戻って来る。

清太「すいません」

向かいの娘「うちら二階の教室やねん。みんないてるからきいへん？」

清太「後で行きます」

去る娘。

清太「食べるか」

節子「お母ちゃんどこ、行きたい」

清太「明日ならな。もう遅いやろ」

節子「……」

座り込む節子。淋しそうに砂をいじる。

清太「節子。いくぞ」

動こうとしない節子。

清太「……」

耐え切れなくなった清太、鉄棒にとびつき、何回も前まわりをする。

清太「見てみ。兄ちゃんうまいで」

#電車の中、朝

節子、靴を脱ぎ、ロングシートの座席に正座して窓から外を見ている。

楽しそうに鼻歌を歌う節子。遠足気分。

その横で黙って座っている清太。

#芳江の家

廊下を歩く芳江(44)。その後、清太と節子。

芳江「たいしたことなくて、不幸中の幸いやったなあ」

清太「……はあ」

清太、節子を見る。

芳江「美弥子さん退院しはったら、しばらくこっちでブラブラしとったらええわ。神戸に比べたら空気もきれいやし、すぐによくやるよ」

#同、納戸

に入る芳江、清太、節子。

ふとんや箱が積まれている。

芳江「こんだけや。焼かれる前に送つといてよかったなあ」

清太、長細い箱をあける。

上品な着物が入っている。清太、懐かしそうに手で触れる。

芳江「しかし海軍さんはええわ。こんだけの荷物でもトラック使うて運ぶんやから」

清太「じゃあ、すんませんけど、節子お願いできますか」

芳江「ああ、構へんけど、冷たいもんでも飲んでったら？」

清太「いいえ。すぐ行きます」

芳江「あ、ちよつと待って」

去る芳江。バナナを二房持って戻って来る。

芳江「こんだけしかないけどな、美弥子さんに持ってっただけ」

清太「……おおきに」

#御影国民学校、工作室

美弥子のベッドの周りに清太と医者A(38)が立っている。

医者A、清太を見て首を振る。

清太「ほうたい取って顔見せてもらえませんか？」

医者A「見ないほうがいいよ。そのほうがいい」

美弥子の頭を撫でる清太。

警官A(50)が同じ部屋で死んだ男の記録を、遺族から取って

いる。

医者A、警官Aに耳打ちする。

警官A、清太のところにやってくる。

警官A「この陽気やからな、六甲の火葬場の庭に、穴掘って焼くよりしやあな
いわ。今日もトラックが出るから、運んでもらい」

清太「はあ……」

警官A「ここに名前と住所書いて」

近くにいた少年がタブロイド版の号外を読んでいる。

少年「すごいなあ、三百五十機の六割撃墜やてえ」

清太「……二百十機か」

少年「え？」

美弥子の枕もとに二房のバナナ。

#芳江の家、三畳間

節子がざぶとんにちよこんと座り、ひとりでおはじきと指輪で
遊んでいる。

芳江がふすまを開けて入ってくる。

芳江「節っちゃん、ちよつとお出かけせえへん？」

答えない節子。

芳江「おばちゃんと源五郎虫捕まえにいこ。大きいのがいっぱいおるで」

答えない節子。

芳江「行かへんの？」

答えない節子。

芳江「じゃあ節っちゃん、おばさん一人で行くで」

答えない節子。

部屋から出て行く芳江。

無言でおはじき遊びを続ける節子。

はじかれる指輪。

#火葬場

広場に掘られた穴に建物疎開の棟木、障子、襖などが乱雑に
まれている。
その上に並べられる数多くの死体。
警防団員C、ぼろに火をつけて投げると、死体が燃え上がる。
かたわらに百個以上の木箱が並んでいる。

#芳江の家、三畳間と庭

おはじきと指輪で遊んでいる節子。

ガラガラと門の開けられる音。

手を止める節子。顔を上げる。満面の笑顔。

* * * * *

門を入り、玄関に向かう女の足。

* * * * *

節子、縁側から庭に出て、足音のするほうに向かって走って
いく。

* * * * *

玄関で呼び鈴を鳴らす女。

節子、女の後ろから抱きつく。強く抱きしめ……。

節子「……」

覗き込んだのは見知らぬ顔。後じさりする節子。にっこりする

隣組の女（45）。

隣組の女「あんた節っちゃんね。節っちゃんやろ。ついさっきあんたの話、し
とったんやで。おいくつ」

節子、恐る恐る片手を広げる。

隣組の女「おうちの人は？」

節子、首を横に振る。

隣組の女「まだ帰らへんの？ じゃあ節っちゃん一人でお留守番？」

節子、頷く。

隣組の女、節子に回覧版を渡す。

隣組の女「じゃあ、後でおばちゃんに、これ渡してくれる？ これは大切な回

覧版やからね。中にも書いてあるねんけど、明日代用食の配給がありませんよって。ちゃんとと言えるか？」

節子、頷く。

隣組の女「おりこうやな、節っちゃん」

隣組の女歌いながら去っていく。

隣組の女『とんとん、とんからりと、隣組……』『ドリフの大爆笑』で知られるメロディ」

#火葬場

行列を作る人々。その中に清太。誰もが肩を落としている。

清太、職員から木箱を受け取る。

木箱を抱えて泣いている老人(65)

#芳江の家、三畳間、夕方

眠っている節子。その横でうちわをそよがしている芳江。

手紙を読む和代(17)。

たんすの上に飾られた軍服姿の幸彦(21)の写真。

和代『謹啓。その後たいへん長々ごぶさたして、何卒お許しください。お母さん、和代にお変わりありませんか、御伺い申し上げます。小生おかげさまで、満州牡丹江にて毎日元氣にご奉公しておりますから、ご休心ください。俸給の一部を郵便小為替にてご送金いたしましたので、国策の線に沿って小額債権でもご購入お願い申し上げます。お母さんと和代が元氣な顔で迎えてくれることを何より楽しみにしています。体に気を付けて。無事帰郷いたします。幸彦。お母様、和代様』

芳江「(節子の顔を覗き込んで)罪のない顔して……」

和代「ずっとええ子にしとって、疲れたんやね」

芳江「あんたもちよつと前まで、こんなふうだったんやで」

和代「……」

芳江「……さつさと降参すればええやん。幸彦が戻ってくれさえすれば、うちはええねん」

和代「特高に引っ張られるで。もうちよつとや。辛抱しよ」

芳江「いつまで待てばええの？ 配給も遅配ばかりで。明日も配給ないんやで」

和代「お母さん、そのうち神風が吹いて、敵をみんなやつつけてくれるで。
な」

芳江「まだそんなこと信じとるんか」

和代「……」

玄関の開く音。

清太の声「ただいま」

和代「あ、帰ってきた。(小声で)今言ったこと、死んでも人前で口にしたらあかんで」

立ち上がる和代。

芳江「言われんでもわかつとるわ」

#同、玄関

和代、続いて芳江が清太を迎える。

和代「おかえり。美弥子おばさんどうやった？」

清太「節子は？」

芳江「部屋で寝とるわ」

清太「実は、今朝亡くなりました。春日野墓地にあります」

芳江「亡くなりはった!？」

清太「大変申し訳ありませんが、もうしばらくここでご厄介になってええですか」

芳江「そんな水臭いこと言わんどいて。苦しいときはお互い様やないの」

清太「おおきに……(顔を上げる)」

節子が起きてきた。

節子「お母ちゃんは？」

和代「お母さん、ちよつと怪我しはったんやて」

節子「まだキイキ痛いのか？」

芳江「節っちゃん、お母さんよくなるまで、おばさんちでいい子にしてよ」

清太「……………」

#同、三畳間、夜

おはじきと指輪で遊んでいる節子。

節子「お母ちゃん、指輪もうせえへんのかな。節子にくれはったんやろか」

清太、立ち上がり部屋から出て行こうとする。

節子「どこに行くのん？」

清太「はばかりや」

節子「節子も行く」

清太「待っどけ。……………節子、その指輪大事なんやから、もうしまっどき」

出て行く清太。再び顔を出す。

清太「あとで連れてつたるからな。そのかわり、おもらししたらお灸すえたるぞ」

#道々小川のひとり、夜

あたりを気にしながら、歩く清太。

小川の近くまで来ると、まわりに誰もいないことを確認し、その場にしゃがみこむ。

清太「お母ちゃーん！」

泣き崩れる清太。

清太のまわりに蛍が集まってくる。

光につつまれる清太。

#芳江の家、芳江の部屋、昼

ミシンを使って内職をしている芳江。

#同、三畳間

寝転んで雑誌を読んでいる清太。近くで遊んでいる節子。

節子「お兄ちゃん、工場いかへんの？」

清太「めっちゃめっちゃにされてしもうた。行っどってしゃあない」

節子「中学校は？」

清太「学校も同じや」

節子「じゃあどうするのん」

清太「……………どうするんやろ」

芳江の家、風呂、夜

湯船につかる清太と節子。

清太『軍国の母』を歌っている。

清太『心置きなく国のため、名誉の戦死頼むぞと、涙も見せず励まして、我が子を送る朝の駅……………』

同、台所、夜

風呂場から清太の歌声が聞こえてくる。

清太の声『散れよ若木の桜花、男子と生まれ戦場に、銃剣取るのも国のため、日本男子の本懐ぞ……………』

和代が芳江に回覧版を渡す。

芳江「どこにあったの？」

和代「あの子らの部屋」

中を見る芳江。

芳江「今日配給あったやないの。なんでこんなものを子供に渡すかな」

芳江、形相を変えて台所から出て行く。

同、風呂場、夜

清太『生きて帰ると思うなよ、白木の箱が届いたら、でかしたせがれあつぱれと、お前の母はほめてやる……………』

芳江が扉を開ける。

芳江「清太さん、そんな大きな声で、ちよつとは周りの迷惑も考えたらどうですか！」

清太「す、すみません」

芳江「(小声で、しかし激しく) そんな歌、二度とうちの前で歌わんでください」

い！」

芳江、扉を閉める。

#同、居間

ちやぶ台の前に座る清太、節子、芳江、和代。

芳江、雑炊の上のほうをよそって清太の前に置く。節子の分も同様につまみ菜ばかりの汁。

芳江、下のほうをしゃくり飯のあたりをよそって、和代の前に置く。

自分たちの茶碗と、和代の茶碗を見比べる清太と節子。

和代「……………」

芳江「こいさんお国のための勤労働員やもん。ようけ食べて力つけてもらわんと」

清太「……………」

#同、台所

芳江、雑炊の底をお玉でがりがり削り、おこげを食べている。

物陰から清太と節子が覗いている。

節子「うまそうやな」

清太「シイッ！（静かに）」

清太と節子に気付かないふりをして、おこげをむさぼる芳江。

#同、三畳間、夜

清太と節子、ふとんを並べて寝ている。

節子、目を開けて空を見ている。

窓から見える月。

節子の体震える。やがてむせび泣き。

寝返りを打つ清太。「またか」と大きなため息。

清太「節子」

清太、節子の背中をさする。

節子「…………おかあちゃん」

少しずつ大きくなる節子の泣き声。

節子「ウウウウウウウ、おかあちゃんに会いたい」

清太「節子、寝ねせえ」

節子「ウウウウウウウ、おかあちゃんに会いたい」

清太「またおばさんに怒られるで」

清太、節子を抱き上げ、あやす。

節子の泣き声はさらに大きくなる。

節子「ウウウウウウウ、おかあちゃんに会いたい」

清太「頼む」

節子「ウウウウウウウ、おかあちゃんに会いたい」

清太「もう勘弁してくれ」

節子「ウウウウウウウ、おかあちゃんに会いたい」

清太「節子…………」

芳江が襖を開ける。

芳江「うるそうて寝られんやないの、毎晩毎晩！ 清太さん、せめてあんた

泣かさんようにしたらどないなの！」

芳江、ピシヤリと襖を閉める。

節子「ウウウウウウウ、おかあちゃんに会いたい！」

節子、さらに狂ったように泣く。

清太「…………」

#同、庭、朝

干されているふとん。まん中が濡れている。

清太、一升瓶の中に玄米を入れたものを棒でつつきながら精米

している。

節子、その近くで小枝を集めている。

清太「人ん家^{ひとんち}で恥かせやがって、このアホ」

節子「……………」

清太「夕飯の後に水飲んだらあかんで、何度言うたらわかるんや」

節子「……………飲んどらへん」

清太「だったら何で小便が出るんや」

芳江が顔を出す。

芳江「清太さん」

清太「はい」

芳江「干されたふとんを指し）こんなもん堂々と干しとつたら、敵機に見つかりまっせ」

清太「……………」

清太、ふとんを片づける。

芳江、家の中に入る。

清太「(節子を見て)何作っとなねん」

砂の器に集められた小枝。

節子「おうどん」

清太「(笑う)そりや、うまそうやな。……………なあ節子。海行くか」

節子「(にこりと笑って)うん。うれしいな」

清太「よし、行こ」

走り去る二人。

#同、芳江の部屋

芳江、ミシンで内職をしている。

節子の笑い声。

がらがらと門の開く音。

去っていく二人の足音。

芳江、手を止める。

#同、庭

芳江、出てくる。

置き去りにされた一升瓶を見つけ、手に取る。棒でつつきなが

ら。

芳江「美弥子さん、どんなしつけしとったんや」

#道

楽しそうに駆けていく清太と節子。

#海、堤防

坂道を駆けのぼる清太、その後から節子。

のぼりきると一面に海が広がる。

清太「節子、早うおいで」

節子、のぼりきる。海を見て、

節子「わあ……」

海を見る二人。

美弥子の声「清太！ 節子！」

清太、振り返る。

#別荘、部屋（回想）

美弥子の膝の上に座り、ちゃぶ台の上で字を書いている節子。

節子「節子、もう『せつこ』って書けるねん」

寝転んで少年倶楽部を読んでいる清太。『巡洋艦摩耶』の載っているページを開く。

清太「これ、お父ちゃんの乗ってる船やねんな」

美弥子「（雑誌を見て）そうや。これや」

節子「節子、もう『せつこ』って書けるねん」

美弥子「節子は覚えるのが早いな」

清太「（節子の書いた字を見て）なんや。『つ』が鏡文字やないか」

美弥子「ほら、ふたりとも、ハッタイコ食べ」

#海、堤防

海を見ている清太、小枝を集めている節子。

清太「節子、覚えてるか？」

節子「なにが？」

砂の器に集められた小枝。

清太「なんやそれ？」

節子「ところてん」

清太「……」

節子「覚えてるって、なにを？」

清太「なんでもあらへん」

#同、浜辺

かくれんぼをする清太と節子。清太が鬼になる。

清太「一、二、三、四、……」

廃船の陰に隠れる節子。

節子の後ろに男の足が横たわっている。

* * *

清太「節子はどこかな……」

廃船の陰から節子が出てくる。

清太「隠れとらなあかんやん」

節子「お兄ちゃん、誰か寝とる」

清太「またどうせ……」

廃船の陰を見る清太。

ゴザを掛けられた男の死体。

清太「あんなん見んでもええよ。あっち行こ」

#同

上半身裸でぼんやりと海を見ている清太と節子。

子供と老婆が一升瓶に海水を汲んでいる。

節子「泳がへんの？」

清太「泳いだらお腹へるやん」

節子の裸、あせもがひどい。

#同、中

清太に支えられながら、節子水に顔をつけている。

清太、笑いながら、節子を励ます。

清太「ええぞ。うまいで、節子。もうちよつとで泳げるやん」

必死に手足を動かす節子。

#芳江の家、三畳間

向かい合って座る清太と芳江。

部屋の隅で人形と遊んでいる節子。

芳江「お母さんの着物な、言うては悪いがもう用もないのやし、お米に変えたらどう？ おばさんも前から少しずつ物々交換して、足し前してたんよ」

清太「……………」

芳江「節っちゃんはどうや。お米食べたくないか？」

節子「白いお米？」

芳江「そりやそうや」

節子「節子食べたい」

芳江「なあ清太さん。ええやろ」

清太「……………はあ」

芳江、立ち上がると押入れを開ける。

清太「……………！」

芳江、なれた手つきで美弥子の着物をめくっていく。

芳江「これや、これや」

芳江、二〜三枚取り出すと畳のうえに置く。

芳江「これで一斗にはなるよ」

清太「一斗？」

芳江「清太さんも栄養つけな。体丈夫にして兵隊さん行くねんやろ」

清太「……………」

美弥子の着物。

#呉駅、待合室(回想)

清太、節子、着物姿の美弥子が椅子に座っている。
美弥子、立ち上がる。
海軍服姿の父親、敏郎(42)がやってくる。
立ち上がって敏郎を迎える三人。
美弥子、敏郎に頭を下げる。
清太、恥ずかしそうにうつむきながら、美弥子の着物をつかんでいる。

#道(回想)

敏郎、節子、美弥子が手をつないで歩いている。
清太、三人を見つめながら、後ろから清太が歩く。
美弥子「清太もおいで」
敏郎、清太を見て微笑む。
清太、かけていき美弥子の手を握る。
見つめ合う清太と美弥子。

#芳江の家、台所

芳江が清太の広口瓶いっぱい米を入れる。
嬉しそうに見ている清太と節子。
節子「白いお米や」
広口瓶の米を眺める清太と節子。
芳江、こっそりと残りの米を自分の米びつに移す。

#同、居間

張り切って茶碗、箸を並べる清太。それを手伝う節子。
芳江が釜を運んでくる。
芳江「炊けはったよ」
清太、節子、和代が集まってくる。

芳江、釜のふたを取る。

四人の歓声。

釜の中には、ふっくらつやつやの白い米。

* * * *

食後。

満足そうな四人。珍しく明るい食卓。

和代「この世で最初にふぐを食べはった人はな、きっと『こんなおいしいものは、生まれてはじめてや』って言いながら死んでったんや。そんなにおいしいんか。どんや味なんやろ。二番目の人は、ちょっとだけつついてみた。なんともあれへん。おいしくもない。三番目の人は、苦しんだけれども、死ななかつた。四番目の人は、舌がぴりぴりするけれど、それだけやった。そんなふうには、ここまで食べて大丈夫や。ここからはだめや、ってわかるまでに、きつと何人も死んどるんや」

清太「その時生まれとったら、やっぱり食ってみるわ」

芳江「死ぬかもしれんやないの」

清太「死んでもええから、おいしいもん食いたいなあ」

笑う四人。

#小川のほとり、夜

蛍の光に包まれる清太と節子。

節子のところに蛍がよっていく。

清太「蛍が節子のこと好きなんやって」

節子、蛍をとろうとする。

節子「あ、つぶれてしもうた」

清太「強く握っちゃあかんで」

節子、手の匂いをかぐ。

節子「くさー」

清太、笑う。

節子「ほたる、こっちやで」

清太と節子、蛍を追いかける。

ぬめるような六月の闇。

芳江の家、三畳間、朝

和代、廊下から部屋の中を覗く。
眠っている清太と節子。

同、台所

芳江、白米の握り飯を作っている。
和代が入ってくる。

芳江、和代に握り飯の包みを渡す。

芳江「さっさとしまつて」

和代「ええんやるか、こんなことして」

芳江「ぼやぼやしとつたら、こつちの分まで食べられてしまうわ。もう行き」

和代、包みをかばんの中に入れて、台所から出て行く。

芳江、残りの握り飯を食べはじめる。

和代の声「キヤア！」

同、廊下

起きてきた清太、節子が和代と鉢合わせした。

和代「なんや、びっくりした。今日は随分早起きやねえ」

清太「……………」

清太、和代の顔を見る。口元にごはんつぶがついている。

和代「起きたらすぐふとんたたまな」

自分たちの部屋に戻っていく清太と節子。

同、台所

握り飯をあわてて食べる芳江。

同、居間

雑炊を食べ終わる清太と芳江。

節子は手をつけようとせず、下を向いている。

清太「節子、早よ食べ」

節子「……………」

芳江「なんや、節っちゃん。お腹いっぱいなの。無理せんでもええよ。後でおばさんが食べるさかい」

清太「なんで雑炊なんですか。まだお米残つとるんとちがいますか」

芳江「清太さん、もう大きいねんから、助け合いいうこと考えてくれな。あんたはお米ちつとも出さんと、それで御飯食べたい言うても、そらいけませんよ。通りません」

芳江、節子の茶碗と箸をひったくるようにして、お盆に乗せると、立ち上がって、部屋から出て行く。

清太「……………」（つぶやく）あれはうちのお米や」

芳江、戻って来て清太の前に座る。

芳江「なんや、そんならおばさんが、ずるいことしてる言うの？ えらいこと言うねえ。みなしご二人預かったって、そう言われたら世話ないわ。よろし。御飯別々にしましょ。それやったら文句ないでしょ」

節子、おびえた表情で芳江を見る。

芳江、節子の前に、節子の茶碗と箸を乱暴に置く。

部屋から出て行く芳江。

#同、台所

食器を洗っている芳江。

清太が入ってくる。空になった節子の茶碗と、箸を置く。

清太「ごちそうさまでした」

芳江「なあ、清太さん」

清太「はい」

芳江「あんたとこ東京にも親戚いてるんでしょ、お母さんの実家でなんやらいう人おったやないの」

清太「むこうも焼け出されたみたいで、連絡つかんのです」

芳江「ものは試しに、手紙だけでも出してみたらどう？ 西宮かて、いつ空

襲されるかわからんよ」

清太「……………」

芳江の家、前の道、昼

袋を持った芳江、去っていく。

芳江の家、和代の部屋

中に入ってくる清太と節子。

節子「見つかったら、また怒られるやん」

清太「大丈夫や。まだ帰ってきいへんて」

オルガンを開ける。

清太「節子、よう聞いとれや」

清太『ドミン』の和音を弾く。

清太「これが『ハホト』や」

清太『ドフアラ』の和音を弾く。

清太「これは『ハヘイ』や。じゃあこれはどっちや」

清太『ドミン』の和音を弾く。

清太「敵の飛行機か味方の飛行機か区別せなあかんからな、普段から耳は鍛

えておかなあかんのや」

節子「そんなことせんでも区別ぐらいつくわ。低いところを飛んどるのが日

本の飛行機で、高いところを飛んどるのが敵の飛行機や」

清太「……………」

道

芳江、主婦A(50)、主婦B(32)、袋に入った白い粉を見なが

ら話している。

主婦A「これはいったい何の粉ですか？」

主婦B「誰かどんぐりじゃないかって、言うてはりました」

芳江「どんぐり？ そんなもん食べられるんですか？」

主婦B「政府が配給したもんやから、食べられるんでしょう、きつと」

芳江「どうやって食べるんですか？」

主婦A・主婦B「……………」

オルガンの音が聞こえてくる。

主婦A・主婦B、芳江を見る。

芳江「すみません」

芳江、家に向かって走り去る。

#芳江の家、居間

清太、『こいのぼり』を弾き、節子それにあわせて歌う。

清太「ホニハニホイト、ホホホニハニ。はい」

節子『屋根より高いこいのぼり……………』

玄関の飽く音。

清太、手を止める。節子も黙る。

ふすまが開く。恐ろしい形相の芳江が中に入ってくる。

芳江、オルガンのふたを思い切り閉める。

恐れおののく清太と節子。

芳江「この戦時中になんですか！ 怒られるのはおばさんですよ。非常識な！」

清太、節子「……………」

芳江「ほんまにえらい疫病神がまいこんできたもんや。空襲いうたってなんの役にもたたんし、そんなに命が惜しいねんやったら、横穴にでも住んどつたらええ！」

#同、三畳間、夜

ふとんを並べて寝ている清太と節子。

#同、台所、夜

芳江がだんごを四つ揚げると、皿に移して和代の座っている前に置く。自分もその前に座る。

芳江「例のどんぐりや。試しに作ってみたんや」

和代「本当にどんぐりなんか？」

芳江「そんなの知らん。なんでもええがな」

和代「……あの子たちの分は？」

芳江「あるわけないやん。さっさと食べ」

芳江と和代、だんごを口に入れる。二人とも顔をしかめる。

和代「……青臭いにおいやな」

芳江「……なんともいえん味や」

芳江と和代、ぶつぶつ言いながらも全て食べる。

和代「おかあさん。前から思ってたことやけど、ちよつとあのふたりに冷たすぎへんか？」

芳江「あんたは昼間工場に出とるからええけどな、四六時中あんなけつたくそ悪いのと一緒におつてみい。頭おかしうなるわ」

和代「はつきり言わせてもらうけどな、お兄さんが出征してから、お母さん変わったわ。前はそんな人やなかったやないの」

芳江「あんた、そのだんご全部平らげといて、よくそんなことが言えるな」

和代「……」

芳江「お父さんが死んで生活が苦しうなって、金かけて大学まで入れた息子も兵隊に取られて、なんでその上血の繋がつとらん子供を育てなあかんの！」

#同、三畳間、夜

ふとんの中の清太と節子。

聞こえてくる芳江の声。

芳江の声「うちがどんな気持ちで生きとるか、あんたちよつとは考えたことがあるの……」

節子「お兄ちゃん」

清太「なんや」

節子「おうち帰りたいわ。おばさんのとこ、もういやや」

清太「おうち焼けてしもうたもん。あらへん」

#同、外、昼

リヤカーの上にまとめられた荷物。

清太、節子と芳江。

清太「えらい長いことお邪魔しました。ぼくらよそへ移ります」

芳江「よそって、どこへ行くの？」

清太「まだはつきりしてませんけど」

芳江「はあ、まあ氣をつけてな。節っちゃんさいなら」

節子「さいなら」

去っていく清太と節子。

#道

リヤカーを引く清太。その横で歩く節子。

清太「誰も俺たちのことを知らんような、遠くに行きたいな」

#ニテコ池

森に囲まれた池のほとりに、大きなほら穴。

清太と節子が到着する。

ほら穴に向かって走り出す節子。

* * * * *

ほら穴の中で蚊帳をつる清太。

はしゃぐ節子。

節子「ここがお台所。ここが玄関」

節子を見て微笑む清太。

* * * * *

池のほとりに生えている雑草を指す節子。

節子「これは」

清太「それは無理やな。そっちはおおばこや。食べられるで」

節子、おおばこの草をつむ。

* * * * *

枝を拾う清太と節子。

* * * *

池の中に入ってタニシを捕まえる清太と節子。

農夫、新井の家

庭のにわとりを追いかける節子。

清太、新井(50)に着物を渡す。

新井、着物を確かめると、清太の広口瓶に米を入れる。

道

リアカーを引く清太。

荷台に乗る節子。固く絞った紙を持っている。その先には火がついている。

荷台には米の入った広口瓶、だいこん、わら。

ニテコ池、ひとり

小さく掘った穴の中。農家でもらった種火の上に、小枝や藁をかけて、清太が息を吹きかけている。
やがて炎が燃え上がる。

同、夜

焚き火の近くに置かれたちやぶ台。

食べ終わり横になる清太。

正座をして食べている節子。

節子「牛になるよ」

清太「節子はろうけたシャンになるで」

遠くに聞こえるサイレン。

節子、おびえて清太にすがりつく。

節子「……」

清太「心配せんでもええ。こんなところに爆弾落としても、しゃあないやん」
節子、茶碗を置く。

節子「ごちそうさま」

清太「風呂にでも入るか」

節子「……………」

清太、服を脱ぐ。

清太「節子も脱ぎ」

清太、池の中に入っていく。

節子も服を脱ぐ。

清太「足つくで」

節子、池の中に入ると、清太が手をつかんでやる。

見上げる夜空。

清太「こうしていると、世界中が俺たちのもんになったような気がするなあ」

節子「そんなもんより、もっとおいしいもんが欲しいわ」

清太、笑う。

節子「あつ、(遠くを指して)あれ」

遠くで空襲。

次々と落とされる焼夷弾が、無数の光の線を描きながら落ちて

いく。燃え上がる地上。

節子「きれいやな。花火みたいや」

清太「信じられるか？ あの下に人がおるねん。…………あ、そうや。蛍つか

まえよ」

#同

無数の光に包まれて、蛍を追いかける清太と節子。

#同、ほら穴の中

蚊帳の中に清太と節子。

清太、箱を開けると中から蛍が次々と飛び出してくる。

ゆらゆらと動く光。

時々見えるお互いの顔。

寝転んで光を目で追う清太。

ブラスバンドの『軍艦マーチ』が聞こえてくる。

#大阪港(回想)

昭和十年十月の観艦式。

大阪港に連合艦隊勢ぞろい。

* * *

六甲山の中腹に船の形をした大イルミネーション。

* * *

商大のブラスバンド

* * *

見物客の中に清太、節子、美弥子。

清太「お父ちゃん！」

* * *

巡洋艦摩耶、船上。

敬礼する敏郎。

清太の声「お父ちゃん！」

#清太の家(回想)

正座して向かい合う清太と美弥子。

美弥子「お父ちゃんの船な、去年の十月に撃沈されたんやと。だからお父ちゃ

ん、もう戻ってこんのや。清太。お前は長男やから、しっかりせなあか

んや」

#ニテコ池、ほら穴の中。

眠っている清太と節子。

息絶えて下に落ちる蛍。

#同、ほら穴の中、朝

蚊帳の中にたくさんの蛍の死骸が落ちている。それらを一つず

つ拾う節子。

#同、外

節子、穴を掘り拾った蛭を埋める。

朝食の準備をしていた清太が声をかける。

清太「今日は何を作っとんねん。あずきか？」

節子「お墓やねん」

清太「……」

節子「お兄ちゃん」

清太「……なんや」

節子「お母ちゃんも死にはったんやろ」

清太「……なんでそんなこと言うねん。誰かに聞いたんか」

節子「……」

清太「本当のこと言うとな、お父ちゃんも、もうこの世におらへんのや。も

う俺とお前だけやねん。だから仲良くやってこ。誰にも邪魔させんと、

二人だけで生きてこ」

節子「仲良くしたいんやったら、お兄ちゃんが怒らんかったらええねん」

清太「……そうやな」

節子泣き出す。

清太、節子を抱きしめる。

#ニテコ池

乱雑におかれた釜や皿。汚れている。

#農夫、新井家

清太、節子と新井。

清太と節子の髪は伸び、服は汚れている。

清太「お母ちゃんの着物、もう残っとらんのです。お金でなんとかありませんか。ちよつとやったら持っとるんです」

新井「何度も言つとるけれども、金じゃ米は売らん。そんなもんだの紙くずやないか」

清太「命助ける思うて、少しわけていただけませんか」

新井「こつちだつて、供出、供出でほとんどもっていかれてしもうてな。おまけに今年は前代未聞の凶作や。悪いけどな、他人にくれてやる米など、一粒もないねん」

清太「……」

#ニテコ池、池の中

清太が節子の体を洗っている。

疥癬でただれた節子の肌。

清太「お婆さんのところ、帰らんか。お兄ちゃんが謝つたるから、きつと許してくれるよ」

節子「……」

清太「これ以上無理やねん」

節子「いやや。行きとらない」

清太「このままじゃ、死ぬで」

節子「お婆さんとこは、絶対いやや。死んだほうがましや」

清太「……」

#ニテコ池、ほら穴の中、夜

出て行こうとする清太。

清太「すぐもどつてくるからな。ええ子にしとれよ」

頷く節子。

去っていく清太。

一人残された節子。ふとんの中にもぐりこむ。

暗闇、静寂。

風の音。

節子「だれ？」

エコーのように響く音。

起き上がりほら穴から出て行く節子。

#道

暗闇の中を走る節子。
べそをかいている。

節子「お兄ちゃん」

清太の姿は見えない。

節子、転ぶ。

暗闇。

節子「お兄ちゃん……置いていかんで」

清太「節子」

顔をあげる節子。

清太が立っている。

清太「臆病もんやな」

清太、節子を起こして土をはらってやる。

#畑、脇

清太「誰かきたらお兄ちゃんのこと呼ぶんやで。しっかり見張つとれよ」

清太、畑の中に入っていく。

節子、清太を心細そうに見送る。

#畑、中

芋を掘り続ける清太

#畑、脇

不安そうに立っている節子。

畑の中に向かって目をこらすが、清太の姿は見えない。

足音が近づいてくる。

近くの茂みに隠れる節子。

近づいてくる足音。

息を潜める節子。

足音、走り出す。

農夫Bの声「おい、なにをしとるんじゃ」

追う足音と逃げる足音。

農夫Bの声「待たんかい」

清太の声「すいません、堪忍してください」

倒れる音。

殴る音。

清太のうめき声。

農夫Bの声「戦時下の野荒しは重罪やねんど。豚箱入りじゃ」

清太の声「妹病気なんです。ぼくおらな、どないもなりません」

殴る音、清太の悲鳴と泣き声。

息を潜める節子。

#同

清太を殴りつづける農夫B(41)。

農夫B「なにぬかす。ここにある野菜はうちの分と違うんや。お国に完納でき
なんたら、こつちが留置させるんや」

#交番

傷だらけの清太が椅子に座っている。放心状態。

興奮気味の農夫が警官B(58)に向かって騒いでいる。

農夫B「待ってください。じゃあ、うちは取られ損ですか？」

警官B「こんな子供よりもなあ、もっと取り締まらなあかん奴らが、ぎょうさ
んおるねん」

農夫B「フン、なにを言うとるんですか」

警官B「このあたりで、闇米を法外な値段や品物でさばいとる奴がおるちゆう
話やが、聞いたことあるか？」

農夫B「ちよつと、それはうちと違いますよ」

警官B「だれもそんなこと言うたらんがな。まあ今日は帰ってや」

農夫B「二度とこういふことがないように頼みますよ」
去っていく農夫B。

警官B 「今夜の空襲は福井らしいなあ」

清太「……………」

警官B、清太の前に立ち顔を触る。

交番の外に人影。

警官B「……………」

#同、外

出てくる清太。

物陰から節子が顔を出すと、清太のところに駆け寄ってくる。

清太、泣き出す。

節子「どこ痛いのか。いかんねえ、お医者さんよんで注射してもらいな」

泣きじゃくる清太。

#医院

医者B 「あげて」

節子、シャツをまくりあげる。

医者B(45)、お腹、背中を一瞥したあとカルテを書く。

医者B(清太に) 滋養のあるもんを食べさせたげなさい。それしかないわ。(看護婦に)

護婦に) 次の人」

清太「ちよっと待ってください。ずっと弱つとるんですよ。注射でもしたっ

てくださいよ」

医者B 「ちゃんと食べれば、健康になるねん。注射なんてできへん」

次の患者が入ってくる。

医者B(清太に) 邪魔や」

清太「……………」

#ニテコ池、ほら穴の中

寝ている節子。その横で座っている清太。

清太「お釜のふたをあけるとな、ブワーって湯気がたって、部屋の中がお米

のええ匂いでいっぱいになるんや。真っ白で、一粒一粒が立つとる。し

やもじを入れると、すうっと中に入って、それをお茶碗によそうねん。ふつくらつやつやのごはんを、お箸でつかんでな、口の中に入れるねん。弾力があって、粘り気があって、よう噛んどると、口の中に甘味が広がるんや。そして飲み込んで、ああ、うまい。もうおかずはいらんわ」

節子「おいしそやな。次とんかつやって」

清太「よっしゃ。こんがり狐色にあがったとんかつが、皿の上に乗っとんねん。ええ肉使うとるから、そんなに力入れんでも、お箸ですうっと切れよる。ソースをちよつとつけてな、口の中に入れるんや。熱いからよくフーフーするんやで。衣がサクサクつとして、中の肉はえらい柔らかい。そんで肉の中からおいしいお汁がじわーっと出てくるんや。……ああ、たまらんなあ」

節子「とんかつ食べたいな」

清太「次は何がええ？ 食べたいもん言い」

節子「魚すき」

清太「ええなあ。割り下は、肉のスキヤキより薄いもんにするんやで。魚は生でも食えるような新鮮なもんや。えびとはまぐりは絶対ほしいなあ。さば、たら、はも、ぶり、まぐろ、……いっぱい入れような。焼き豆腐、しらたき、ささがきごぼう、生しいたけ、青ねぎ、春菊……」

節子、苦しそうに息をしている。

清太「しんどいか。ちよつと休み」

清太、節子の汗を拭いてやる。

節子「お腹いっぱいになったわ。おおきに」

#街

空襲警報のサイレン。

来襲するアメリカ軍の艦載機が、次々と爆弾を落とす。

逃げる人々。反対側に向かって走る清太。

人っ子ひとりない路地にやってくる清太。

清太、あたりを見回すと、民家の門を開けて中に入っていく。

民家、台所

清太、釜と米びつの中を見るが何もない。
にんじん、たまねぎ、きゅうりなど食べられるものを片っ端から袋の中に入れていく。
さらに食べられるものを探す清太。はっさくを見つけ、袋の中に入れる。

同、居間

清太、たんすを開けると、振袖など派手な着物を選んで袋の中に入れていく。
清太、蓄音機を風呂敷で包んで背おう。さらに金になりそうなものを手当たり次第つかみ、袋に入りきらないものはシャツやズボンの中に入れる。

道

山に向かって走っていく清太。

新井の家

清太に渡された振袖を見ている新井。

新井「……………自分には姉さんがおったんか」

清太「……………」

新井「自分のもんやないやろ。どこでかつぱらってきた」

清太「……………」

新井「海軍さんの息子ねんやろ。お父ちゃんお国のために命捧げたんやろ。

それなのに自分は盗っ人になって苗字に泥を塗るんか」

清太「……………」

新井「返して来い」

道

雨が降りだす。

濡れながら荷物を抱えて歩く清太。

#ニテコ池、ほら穴

戻って来る清太。荷物を地べたに置く。

眠っている節子。

清太、蓄音機のハンドルを回す。流れてくる流行歌。

清太、ぼんやりと外を眺める。

激しい雨。

稲妻と落雷の音。

#防空壕の中（回想）

爆撃の音。

避難してきた人々。

一番奥で清太と節子が申し訳なさそうに座っている。

ひそひそ話をする隣人A子(45)、隣人B子(50)、隣人C(58)。

隣人A子の声「ええ年して、いつも真っ先に飛び込んできはるわ」

隣人B子の声「普通、市民防火活動の中心になるのと違う？」

隣人Cの声「あの奥さんも、えらい穀つぶし押しつけられたなあ」

肩を寄せ合っている清太と節子。

#ニテコ池、ほら穴

降りつづける雨。

外を眺めている清太。

清太「なんで、俺が生きとるんやろ……」

眠っていた節子、目を覚ます。

節子「雨こんこん、やまんねえ」

清太「起きたか。……せや」

清太、袋の中からきゅうりを取り出そうとするが、逡巡して元に戻す。

節子、起き上がる。

節子「……………はっさく食べたいなあ」

清太「……………なあ、節子」

清太、袋からはっさくを取り出し、得意げに節子に見せる。

清太「ほら」

節子「わあ！」

清太「節子が食いたいやる思うてな、お兄ちゃん貰ろうてきたんや」

清太、はっさくの皮をむき、節子と二人で食べる。

節子「お兄ちゃん、節子の欲しいもんなんでも出してくれるな。魔法使いや」

はっさくをおいしそうに食べる節子。

清太「体はどうや」

節子「お兄ちゃん……………もうどこにも行かんで。お願いやから、ずっと節子

のそばにいて。お兄ちゃんおらんと、心細いねん」

清太「心配せんでも、お兄ちゃんいつまでも節子のそばにおるよ」

節子「ほんま」

清太「ほんまや。もう節子しか、お兄ちゃんのこと好きになつてくれる人、

おらへんもん」

#同、朝

節子、眠っている。

清太、盗んだ荷物を抱えると、節子を起こさないように穴から出て行く。

#街

とぼとぼと歩く清太。

飛行機の音。

近づくP 51。

清太、音のするほうを見る。

すぐ真上にP 51。

清太、操縦士(25)と目が合う。

にやりと笑う操縦士。

その場に立ちすくむ清太。
機銃掃射。

#防空壕、中

逃げ込んでくる清太。

震えている。

* * * *

節子のフラッシュ・バック

節子「お兄ちゃん」

* * * *

清太「節子！」

出て行こうとする清太。初老の男（58）が清太をつかむ。

清太「離してください。妹が怖がっとなるんです」

初老の男「今出てつても犬死にするだけや」

清太「俺がおらんとあかんのです」

芳江「清太さん！」

芳江が清太のところに来る。

初老の男、清太を離す。

清太「おばさん……」

芳江「ニテコ池におるそうやね。節っちゃんは元気？」

清太「実はもうどうにもならへんのです。今までの事は、謝りますから、ど

うか助けてください」

芳江「清太さん……」

清太「勝手なこといけませんから、言うこと聞きますから、もう一度置いて

やっていただけませんか」

芳江「許して」

清太「……」

芳江「もうあの家は焼けてしもうたんや。幸彦も和代も死んでしもうたんや。

おばさんも、これからどうしていいか、わからんねん」

空襲警報解除され、人々防空壕から出て行く。

清太「……………すみませんでした」

出て行こうとする清太。

芳江「清太さん、節っちゃんに、これ持ってってやり」

芳江、清太にトマトを渡す。

#ニテコ池、ほら穴の中

トマトを切る清太。

ふとんに寝ている節子。うつろな目。

節子「上行った……………下行った……………あ、とまった」

清太、切ったトマトを節子にやろうとするが、節子、いらないと顔をそむける。

清太、節子の枕もとにトマトを置き、外を眺める。

穏やかな夏の夕暮れ……………。

節子「……………お兄ちゃん」

清太「……………」

節子「(べそをかきながら) 堪忍や」

清太「どうしたんや」

節子「うんこ、もらしてもうた……………おふとん、汚してもうた……………堪忍や」

節子、恥ずかしそうに泣く。

清太「ええねん……………そんなこと、どうでもええねん」

清太、節子の顔を優しく撫でてやる。

清太の目から涙が溢れてくる。

清太「そんなこと、どうでもええねん」

#同、池

清太、節子の下着を洗う。

#同、ほら穴の中。

清太、眠る節子を膝の上にのせ、頭を撫でている。

* * * * *
清太、動かない節子を膝の上に乗せ、眠っている。

#同、朝

清太の膝の上で動かない節子。青白い顔。死んでいる。

#同、外

行李の中に節子のなきがら。

清太、そのまわりに人形、がま口、下着を入れる。

#道

行李を背負って歩く清太。

#市役所

行李を背負っている清太と、職員(42)。

職員「火葬場満員でな、一週間前のがまだ処分できんのだ」

清太「……そうですか」

職員「子供さんやったら、お寺の隅など借りてやかせてもらい。裸にしてな、

大豆の殻で火をつけるとうまいこと燃えるわ」

職員、清太に木炭の入った袋とマッチを渡す。

#丘の上

大豆の殻を敷き、木を並べ、木炭ぶちまけた上に、節子を入れた行李をのせる。

清太、付け木に火をうつして放り込む。

燃え上がる行李。

#様々な節子。(回想)

笑う節子。

走り回る節子。

泣く節子。

眠る節子。

清太にもたれかかる節子。

#同、夜

清太、節子の骨を拾い、ドロップ缶の中に入れる。

* * *

清太、ドロップ缶を抱きしめて眠る。

F・O

F・I

#道（幻想）

節子「お兄ちゃん、大丈夫か」

眠っていた清太、目を開ける。

節子が立っている。

清太、立ち上がる。

節子、清太の手を引っ張る。

節子「みんな待ってるで」

かけていくふたり。

曲がり角をまがる。

清太「うわっ！」

清太、驚いて思わず立ち止まる。

#闇市（幻想）

通りにずらりと並ぶ食べ物屋。

握り飯、大福、焼飯、ぜんざい、うどん、ライスカレー、天丼……。

人々がいたるところで、あらゆるものを食べている。

活気のある通り。

節子「こっちや」

店の中に入る節子と清太。

#店の中（幻想）

中に入る節子と清太。

座っていた敏郎と美弥子が清太を見る。

美弥子「清太、こっちや」

敏郎「どこ行っとったんや」

席につく節子と清太。

テーブルの上には、ごはん、てんぷら、寿司、魚、中華料理など様々な料理が並んでいる。

美弥子「好きなだけ食べてええんやで」

清太・節子「いただきます」

食べる清太。

食べる節子。

食べる敏郎。

食べる美弥子。

食事をしながら、笑って話す四大家族。

清太の声「今日はなん日やろ」

通行人Aの声「ああ、きたないなあ」

通行人Bの声「アメリカ軍がもうすぐ来るいうのに恥やで、駅にこんなおつたら」

#三宮駅、構内

清太、両足を投げ出してコンクリートの柱にもたれかかっている。動かない。

抱いていたドロップ缶が下に落ちる。

構内の柱ごとに浮浪児たちが座り込んでいる。

一人の不老児の横に握り飯をそつと置く老婆。

学生服、セーラー服（下はもんぺ）姿の学生たち、浮浪児に目もくれず通り過ぎていく。

駅員A（28）が清太を調べている。

駅員 A 「こいつ死んどるわ」

隣の柱にいた浮浪児を見ていた駅員 B (32) がやってくる。

駅員 B 「こっちのやつも、もうじき行ってまいよるで。目えポカッと開けてるよ
うになつたらあかんわ」

駅員 A、ドロップ缶が落ちているのに気付く。ふたを開けよう
とするが動かない。

駅員 A 「なんやこれ」

駅員 B 「ほっとけ、ほっとけ。捨てとつたらええねん」

#同、駅前の焼け跡、夜

駅員 A、夏草の生い茂るほうに向かってドロップ缶を投げる。

転がった後、蓋が開き、中から白い粉がこぼれる。

驚いた蛭二、三十が点滅して飛び交う。

一瞬あたりが明るくなる。

エンドロール流れて

了

約九十二枚